

『血液検査で がんの有無はわかりませんか？』

「バリウムもカメラの検査もいやだし、血液検査でがんの検診ができないのかなあ？」

「血液検査の“腫瘍マーカー”って、がんがあるかないかが分かるんだよね？」

このあたりの疑問にお答えしたいと思います。

がんになると、そのがんが作る物質が血液中に出てくることがあり、これを「腫瘍マーカー」として調べることができます。現在、何十種類もの腫瘍マーカーがありますが、がん検診に使われるものはほとんどありません。

理由としては、

- ・早期発見にあまり役立たない（異常値がでる頃にはがんが進行していることが多い）
 - ・「偽陽性」（がんがないのに、異常値がでること）がある
 - ・「偽陰性」（がんがあるのに、異常値がでないこと）がある
 - ・臓器特異性が低いものが多い（どこにできたがんによるものかまで分からない）
 - ・過剰診断となることがある（治療をしなくても死亡の原因にならないがんを発見する）
- などがあげられます。

つまり、血液検査（腫瘍マーカー）でがんの有無がわかることもあるけど、検査結果は絶対的なものではないということです。がん検診の目的は、がんにより亡くなる人を減らすことにありますが、現段階でそのような有効性が認められている腫瘍マーカーによるがん検診はありません。

では、現在がん検診として使われている腫瘍マーカーにはどのような特徴があるのでしょうか。



まず、PSA（前立腺がん検診）とペプシノゲン（胃がん検診）ですが、この2つは臓器特異性が高く、それぞれ前立腺と胃の異常をチェックするものという特徴があります。しかし、がんの有無が確定できる検査ではありません。PSAは前立腺の炎症や前立腺肥大などでも増えてくるからです。ペプシノゲンは胃がんの下地となる慢性萎縮性胃炎の有無を知ることができる検査です。どちらも、異常があればそれぞれの精密検査を受け、がんの有無を確かめます。

また、人間ドックなどではCEA、CA125、CA19-9、AFPなどを実施することがあります。これらの腫瘍マーカーは、異常値がでて、それががんによるものなのか、異常がある臓器はどこなのかを確定することができません。データの異常を足がかりに、がんの有無を調べていくことになります。隠れたがんの発見につながることがありますが、より早期のがんを見つけるには十分ではないかもしれません。個人のリスクを減らす対策として受ける検診といえます。

今後研究が進み、がん検診としてとても使える腫瘍マーカーが誕生するかもしれませんが、現段階ではそれぞれの特徴を知った上で受け、結果の解釈が必要な検査だと思います。一般のがん検診を定期的に受診するのがまず大事、そう思っています。